

論
文
編

一、竹野町の平家落人伝承

一、但馬の平家落人伝承の系類

(1) 系類

平成二年十一月現在、筆者が調べた限り、但馬には、平家落人伝承にゆかりある地区は、次の四一があげられる。その中で、竹野町には七地区あり、多い町にはいる。その地区名は次のとおりである。

①豊岡市伊賀谷・②同市谷・③同森尾・4同気比・5城崎郡城崎町湯島・⑥竹野町田久日・⑦同宇日・⑧同鬼神谷・⑨同三原・⑩同川南谷・⑪同須井・12同神原・⑬香住町浦上(丹生浦)・14同上計・15同丹生地・⑯同鑑・⑰同御崎・18同畑・⑱同土生・⑳同本見塚・21日高町上郷・㉒美方郡浜坂町三尾・23同戸田・⑳同正法庵・㉕同辺地・㉖同大味・㉗同池ヶ平・㉘美方町野間谷・㉙同備・㉚同小長迪・㉛村岡町小城・㉜同板仕野・㉝同春木・34朝来郡朝来町桑市・㉞同岩津・㉟和田山町朝日・㊱生野町黒川・㊲養父郡養父町熊野・㊳大屋町横行・40八鹿町小田・㊴同奥大江。

なお、鳥取県岩美郡国府町岡益には、安徳天皇参考地の岡益石堂があり、但馬の平家落人伝承と深いかわわりを持つ。また八頭郡若桜町落折も、高野聖と深いかわわりを持つ平家落人伝承を持つ地区であり、参考地区として加えておく。数字を○印で囲んだ所は、地区全体が落人の末えいと称している地区、○印のない所は、特定の家または寺などがその伝承を持っている所である。また、過去にこの伝承を持っていたが、現在では忘



図44 但馬の平家落人伝承地区図

れている地区（家など）もある。

これを系類に分けることは容易ではないが、一応次のようになる。

(1) 木地屋系 (2) 豊岡市市谷・(9) 竹野町三原・(10) 同川南谷・(20) 香住町本見塚（もとは修験者の定着地）・(24) 浜坂町正法庵・(25) 同辺地・(27) 同池ヶ平・(28) 美方町野間谷・(29) 同備・(30) 同小長池・(31) 村岡町小城・(36) 和田山町朝日（熊野信仰と重層）・(37) 生野町黒川の二三地区。

(2) 高野聖系 (11) 竹野町須井・12 同神原・(13) 香住町浦上（丹生浦）・15 同丹生地・(17) 同御崎・18 同畑・(19) 同土生・(22) 浜坂町三尾の八地区。

(3) 熊野系 (8) 竹野町鬼神谷・(35) 朝来町岩津・(36) 和田山町朝日（木地屋と重層）・(38) 養父町熊野・40 八鹿町小田・(41) 同奥大江の六地区、別に(16) 香住町鎧がある。鎮守社は十二所神社（旧十二所権現）があり、嵯峨家が代々神主役をつとめている。同地区に越中次郎兵衛盛継の後えいと称した越中家があるが、直接同神社との結びつきが明らかでないので疑問としておく。

(4) 景清系（盲僧が唱導） 4 豊岡市気比・(6) 竹野町田久日・(7) 同宇日の三地区。

(5) 巫女・比丘尼系 (17) 香住町御崎（高野聖と重層）・(26) 浜坂町大味・(39) 大屋町横行・40 八鹿町小田・(41) 同奥大江の五地区。

(6) その他 浄土宗系 (32) 村岡町板仕野、あるき横行系(39) 大屋町横行（巫女系にもなる）。

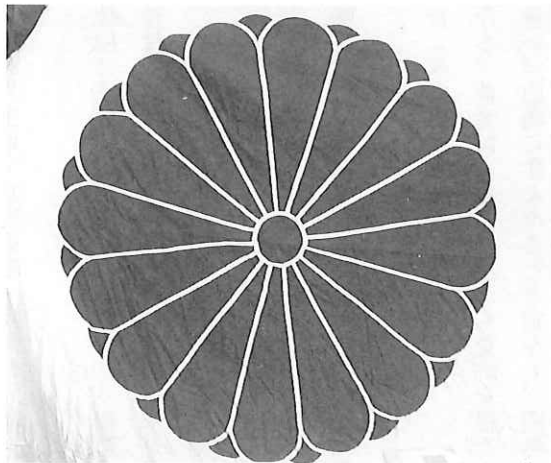
これを大別すると、木地屋系と宗教者が関与した地区の二類となる。前者は、惟喬親王（三上）から免許を得たとの誇りを持つことから、同地区の神社には菊の紋を使っている例が多い。山奥に住んだことと重なり、漠然と平

家落人伝承を物語ったとの感が強い。その結果と思われるが、現在ではこれが忘却された地区が多い。なお、他の宗教者がかわりを持った地区と比べ、石塔類を建立した痕跡もない。もしある場合は、宗教者の介在が重層している地区である。これに対し、宗教者が介在している地区には、平家落人の霊をしずめるために供養塔を建立した例が多く、その他、同様な立場から、神社・寺を建立した例も認められる。神社の多くは荒神で、その他熊野権現などである。それらの各村々では確固とした資料は散逸しているが、平家落人の後えいであるとの誇りを今に伝えている。

(2) 各分類の分析

1 木地屋系

前記したが、同地区に平家落人伝承の生まれた理由はつかみ難い。その中で、ただ一つ次の伝承を得た。²⁷⁾ 浜坂町池ヶ平のことであるが、地区の中央部に池がある。その中に大蛇がいて、傍らに木地屋一家が住んでいた。ある時、その子供が大蛇に捕えられた。怒った木地屋が弓で射ると、淵を切って逃げた。それで、鎮守社八大龍王社の境内に、大蛇と木地屋の墓をつくった(伝承者池田滋氏・同都美江氏)。しかし、この伝承の中に、平家落人の要素は認められない。それよりも、同社裏山頂上に祀られてある宝篋印塔などの残欠があり、



写250 辺地三柱神社幕の菊の紋

かつては地区民一同が参ったということがそのルーツのように思える。

⑳香住町本見塚が同じ条件である。木地屋地区であるが、五輪山には安徳天皇(『本見塚村』久保家の伝承)、または平重盛(『奥佐津志考』)の供養塔といわれる数基の五輪塔がある。旧九月二十一日は「五輪祭」で、地区民こぞって参っていた。鎮守社は現在大倉神社(前小倉神社)であるが、同社内に須賀神社(旧荒神社)が祀られ、平家の守り神さんと信じられている。同社の棟札によると、慶長十九年(一六一四)に、天小大神(天照大神力)を甲州から勧請した。この時隨身の内に「五人山伏也」とある。一時、同地区は「三密村」と称したともある。下って享保十四年(一七二九)に小倉神社を造立したとある。こうしてみると、同地区は前は修験的傾向があつたところに、江戸中期に木地屋が来て、同系住民が主力となつたと考えられる。そして、平家落人伝承は、その修験時代に求められる。池ヶ平も同様の線が認められる。

2 高野聖系

⑰香住町御崎・18同畑・12竹野町神原 先ず御崎であるが、『但馬顕晦録』(以下『顕晦録』)と略称、天和二年(一六八二)刊)によると、御崎には、門脇宰相教盛(清盛の弟)・伊賀平内左衛門家長・子息平内光長・平通盛(教盛の子)の内室小宰相ノ局等が落ちて来、これを同地鎮守伊楽いざか神社の修験者森本浄実坊に救われた。さらに小宰相局は、中村八郎吉純に供奉され、二方郡(現・浜坂町)大味にひそみ天命を終わり、伊賀平内左衛門家長は佐津庄天神山(現・香住町畑、天神社跡がある)にひそんだとする。

ところが、同地区の嘉永五年(一八五二)御崎村矢引・伊賀の兩人より生野御役人に提出した「書上」によると、森本浄実坊は、「高野山聖のよし」となっている。御崎には、坂本山王権現(現・日吉神社)が祀られ

てあり、修験者森本浄実坊はもと天台系ではなかったかと考えられる。それが、少なくとも天和二年以後、高野聖の介在があり、同坊も宗旨を変えたと思える。畑地区には、伊賀家が現存し、鎮守社八柱荒神境内の傍には、家長の供養碑もある。天神社があつた森も、村はずれにある。家長の霊を祀つたと考えられる。これに対し、『顕晦録』にはないが、同地区には小松家があり、平重盛の子孫と称し、地区内鎮守社はもと、同家の氏神であつたという。事実、同社内に木札があり、(表)「謹請八大荒神祈^{とろ}攸」(裏)「享保十四年九月^{五日}祭日^{六日}小松家氏神」とある。享保十四年(一七二九)に勧請したもので、同家氏神とし重盛の霊を八大荒神として祀り鎮めている。小松定光氏談によると、明治の神仏分離の際、御神体改めで、久美浜代官所に取り上げられしばらくは御神体がなかった。昭和二十七、八年のころ、同家の蔵にもう一体あり、それを同氏らが移したという。個人の氏神を地区鎮守社としたことは、他にもある例で、同家が有力であつた時代があつたためと思える。

『兵庫県神社誌』(下巻八)(十七頁八)によると鎮守社は寛正五年(一四六四)の建立とあるので、室町中期に勧請されたと考える。同地区にも高野聖の墓がある。御崎と呼応し、同聖が活躍した時代があつたと思える。12竹野町神原には、伊賀家があり、畑の同家の分かれと称している(伝承者伊賀久治郎氏)。同地にも伝播者が来ている。

⑬香住町浦上、『顕晦録』によると、丹生浦に飛驒三郎左衛門景経が落ちたとする。同地区には平家谷があり、その奥に五輪塔が祀つてあるという。鎮守社丹生神社の祭神は、丹生・高野両明神とある(社誌^{『兵庫県神社誌』}下巻神)。この両明神は、高野山の地主神であり、高野系僧の介在は明らかである。同地帰仰寺の縁起によると、丹治比経忠が落ちて来、入道して浄恵といひ平家谷に廻向院を建立したとある。この浄恵は高野聖であつたかと思える。これは『顕晦録』の伝承とは異なる。

15 香住町丹生地・⑪竹野町須井・⑲香住町土生 丹生地の幸福寺(曹洞宗)の「古寺取調書」(明治二十一年)によると、同寺はもと真言宗で、平家の余党丹生道昭が落ちて来、戦死した人々の冥福を祈るため入道し輝雲といひ、同寺(幸福菴)を建立した。兄弟三人で、一人は須井、一人は土生に落ちたとする。輝雲入道は高野聖と考えられ、その兄弟とされる須井・土生に行った人もその仲間として誤りない。『蹟晦録』には、須井に飛驒三郎左衛門景経が落ちたと記す。

⑳浜坂町三尾は、海に臨む孤立した地区である。海を伝わって貴人渡来の伝承も多い。神功皇后、後鳥羽上皇も来たという。上皇については、天子岩・お休み岩、また宝篋印塔などもある。平家落人地区との伝承もあり、鎮守社八柱神社(旧八大荒神社)には、現在でもその印の赤色の幟を立てている。中村昌義家には、平家が泊った札に赤さやの刀を置いていったと伝え、小西秀次郎家の墓碑には「初代従三位中納言小松三郎平知盛」とある。脇本三郎衛門家の墓地には、高野聖の墓がある。同聖が来て、活動したと思える。

3 熊野系

⑧竹野町鬼神谷の、鎮守社八幡神社は、もと「熊野若一王子社」であった。同地区に八大荒神があるが、延宝六年(一六七八)の棟札によると、立花姓七戸、平姓五戸が連名しており、この両姓の家の地神であった。この中で、平姓は明治になり平岡と改めるが、同家はもと平家の落人であった。特に平次郎兵衛家・同次郎太郎家の先祖は兄弟で、そのもとだといっている。この両姓の家筋は、もと熊野系の行者で、同地に定着したのもと思える。八大荒神は、平家の誰かの怨霊を祀り鎮めたものと考えられる。

㉓朝来町岩津には、熊野神社(旧熊野権現)を祀る。『朝来志』によると、同社はもと奥谷の「当ノ岩」に

あったが、明治五年、現在の小字中山に遷座した。伝承によると、文治年中（一一八五―九〇）、平氏の将某を奉じた家臣、清原・平・大友・赤曾部等が、この岩まで来て隠れたが、その武将は死んだ。そこでその霊を祀り熊野権現として祀ったという。当地区は旧正月五日、お当の行事を嚴重に行なうともある。実地調査をすると、明治六年の棟札に、同年御遷宮の式を行なっているが、天正五年（一五七七）に、字観音山に鎮座するとあり、この時に祀り始められたと考えなければならない。御当組一三人が定められ、前記の姓の者が、この行事を嚴重に現在でも行なっている。江戸時代の当状が各家に残っているが、清原一家の元禄十四年（一七〇一）のには、清原朝臣三助丸が三百五十四日の精進を行ない当役を勤めている。嘉永六年（一八五三）になると清原家次庄藏丸は、「月々の参詣」を勇猛精進して行なったとある。一年中の精進が月々の参詣に代わっている。神事には百姓も姓を使っている。この御当組は、天正五年に当地に定着した熊野系の行者であり、その間に落人伝承は生まれている。

③⑥和田山町朝日は、木地屋もいたと伝えるが、鎮守社下方にある観音堂の正面上方の欄間には、菊の紋がはめこまれており、これを実証する。さらに住民の姓の中に「徳網」というのが多く、有力家筋であった。同地区で一番有力な家であった朝日家（もと日下部家、当地に逃れ来て土地の名を姓と改める）の系図によると、同地先住の郷民「徳阿弥家」と婚姻を結んでいる。後、一時同姓を名乗った時代もあった。江戸初期のことである。この点から、同姓は、明らかに下級宗教者がよく使った「阿弥号」であることが確認される。さらに鎮守社は熊野権現であり、同系の修験者が定着した土地と考えられる。この中から平家落人伝承は生まれたのであろう。

さらに注目されることがある。日高町野々庄^{三野神社}（旧十二所権現）の近世における神主役は、神子朝日が勤め、主人はその補佐役であった。その外、但馬地方の神社を調べると、例えば竹田の表米神社神主の妻は、「朝日越前」「朝日摂津」（養父町熊野神社の棟札）であった。「朝日神子」の名がよく出てくる。三野神社の場合、明らかに熊野比丘尼の定着が考えられるが、これが朝日地区と関連あるかどうかは、今後の興味ある研究課題である。

③⑧養父町熊野・40八鹿町小田・④①同奥大江については、小田の斎藤庄治家の縁起書『斎藤五郎信実当地在住由緒』^{（養父町森・伊藤豊秋蔵）}によると、平重盛の長男維盛の家来斎藤五郎信実が、維盛の妻と幼君虎若丸を奉じ、小田に落ちて来た。その分かれが、さらに奥大江に落ちた。同地区は、池田姓が殆どで、平家落人の末えいだと称しているが、鎮守社も明治までは若王子宮で、熊野修験道系のものであった。注目されるのは尼寺跡が二カ所もあり、維盛の妻を奉じて来たことを考え合わせると、斎藤家及び同地区への伝播者は尼僧が考えられる。この一行の中、大納言平頼盛（清盛の弟）を奉じる者がいて、さらに逃げ養父町熊野に移った。同地のもっとも有力な盛谷源左衛門家は、その末えいだと述べる。これは、同家が頼盛の怨霊を祀り鎮めた宗教者（男性）の子孫だと考えられる。鎮守社が熊野権現である。こうして考えてくると、この三地区には、熊野修験道系行者の導入が考えられる。それも、斎藤・池田一統は熊野比丘尼、熊野は男性のそれが考えられる。

4 景清系

悪七兵衛景清の伝承をひろめたのは、盲僧のグループだといわれる。4豊岡市気比には、越中次郎兵衛盛継が潜居したといわれ、白山の中腹にはこれを供養する宝篋印塔が建立されている。ところが、小字松本には山

につづいて岩があり、そこに六地藏とその下部に船が線刻され、景清地藏と呼んでいる。景清の伝承を唱導する盲僧が来て、それを刻んで宗教活動したと思われる。この場合、盛継の供養塔とは、位置的にも離れており、関連も認められない。⑥竹野町田久日・⑦同吉日、この両地区は、日本海に面する隣接する場所にある。昭和四十年、但馬海岸有料道路が開通するまでは、孤立した地区であった。ともに、越中次郎兵衛盛継と景清が落ちて来たという伝承を持つ。特に田久日の場合、地区中央部にある観音堂傍らに「八方龕」と称する石龕せきぐらがあり、中に室町時代の三基の一石五輪塔が祀られてある。傍らに前記両者の供養塔だとある。根兵秀太郎家裏にも同じものがあり、中に室町後期から江戸初期にかけての一石五輪四基が祀られてある。同じ目的のものと思える。ところが『顕晦録』には、景清と主馬判官盛久が落ちて来たとする。他の件でも同書のは、時折り現地の伝承とは異なる場合がある。この場合、自分を景清自身と観念した盲僧が、越中次郎兵衛または主馬判官の一代記を、この供養塔にことよせて鎮魂のため、物語ったものと思える。

5 巫女・比丘尼系

女性宗教者の存在も意外に多い。⑩香住町御崎・⑪浜坂町大味 御崎・大味については既に高野聖のところ



写251 観音堂傍らの八方龕（田久日）

で述べた。御崎に落ちた一行の中に、小宰相局の名があることは、女性宗教者、それも比丘尼と思われるが、混っていたと思える。さらに大味にこれを中村神主家が奉じて落ちたとするのは、その比丘尼が分かれて同地に定着したものと解される。同地鎮守三宝荒神社は、「余部村部落誌考」〔御崎在村誌考四、小〕（林哲夫編、大正十三年）によると、もと御霊神社で、平通盛・小宰相局・中村八郎の三人を祀るとある。この三人を挙げたのは、三宝荒神となった段階で、「三」とらわれたものと思える。通盛は小宰相の夫であり、御霊神はもと小宰相局一人であり、これを中村八郎家が同社に祀り鎮め同家始祖も神格化して祀ったものと思える。

③⑨大屋町横行には、姫が一行と落ちて来て地区後方の山頂に「平家カ城」を築いていたが、源氏が攻めて来たといい、傍らの「姫カ淵」に身を投じた。地区を開いた六軒衆は藤原姓を名乗るが、この人達が姫とともに落ちて来た平家の落人の子孫だと伝える。「平家カ城」に登ってみると、岩座いわざ（神祀りをする岩）で、とても城などを築いた所と思われない。竹野町草飼にも、比丘尼城という山があるが、そこから落ちたという人の一人が、伊豆・箱根権現として祀られている。こども、もと修験系の比丘尼がいた所だと思える。ところで、この「横行」という名称であるが、興福寺に「七道者」がいて、その中に「あるき横行」という下級宗教者の名がある。他に「あるき御子」「あるき白拍子」の名もある。姫を奉じて来たというから、この遊行者も女性宗教者だと考えられる〔大乗寺権事記寛正四年十一月廿三日条〕。この「横行」が地名となったと思える。それも寛正四年（一四六三）の記述なので、室町時代中期に存在していた。そのころ来訪、定着したと考えて誤りないであろう。40八鹿町小田・④同奥大江の熊野比丘尼については、前に記した。

③村岡町板仕野 鎮守郡主神社には、平重盛の木像が祀られてある。但馬にこうした木像など祀られているのは、これが唯一である。同地には、以前、竹原山重盛院長福寺（後に真言宗）があった。寺伝によると、治承四年（一一八〇）に、但馬守平経正が重盛の供養のために建立、法然上人の徒善教が開山となった。郡主神社の別当寺でもあったが、慶安四年（二六五二）に大雪のため倒れて頽廢した（『七美郡誌稿七十三頁』）。その開基については疑問が残るが、浄土系の善教により、重盛供養のために開かれたのは事実と考えられる。

二、平家落人伝承に現われる人名

但馬で認められる平家落人は数多く、今その名を挙げると次のようになる。

(1) 越中治郎兵衛盛繼（「嗣」の字を使う場合もあるが、『吾妻鏡』に従い、特別な場合以外は「繼」を使用）
 4 豊岡市氣比・5 城崎町湯島・⑥ 竹野町田久日・⑦ 同宇日・⑧ 香住町鎧・34 朝来町桑市がある。平家落人伝承の中で、唯一人実際に来た可能性が考えられるのが、盛繼である。『平家物語』（『六代校訂 岩波大系本』）によると、氣比にまで逃げて来て捕えられ、鎌倉由井の浜で斬られたとある。しかし、『吾妻鏡』（『建久三年七月二十四日条』）には、丹波の国や方々に逃げ隠れ、会稽かきの志ある者として追討されている。最後は分からない。ところで、城崎と氣比（白山）には同時代と思える宝篋印塔が建立されている。特に城崎のは、現在は弁天公園（旧神楽丘）に祀られているが、もと円山川畔の渡し場にあった。建立年代も、応安元年（一三六八）と銘文にあり、南北朝時代に宗教者がここに訪れ、盛繼にゆかりある所として、その霊を供養するために建立し、渡し船で往来する人を相手に宗教活動をしたと考えられる。この点を考えると、盛繼の生存時代とはずれ、歴史的事実とは次元が異なり、後に宗教者がその霊を供養したものである。氣比の場合も同様である。

⑥田久日・⑦宇日・⑧鎧については、すでに前節で触れた。34桑市の場合、同地では、古墳の上に八幡宮・脇神に恒正大明神（平恒正、但馬守を勤めた）・八大荒神を祀り、「船宮」といつているが、その鑰取り役をつとめる越中家が傍らにある。同家の伝承によると、盛継が「ぬれ草鞋」をぬいだ家で、その子孫だといっている。日輪寺観音堂の文化二年（一八〇五）棟札に「神主次郎兵衛」とあり、宗教者の末えいである（（越中家）略記）。

(2)門脇宰相平教盛・小宰相局（平通盛の妻）・伊賀平内左衛門家長 『顕晦録』によると、この平家血筋の兩人の他、侍大将伊賀平内左衛門家長・子息平内光長、郎党中村八郎吉純・矢引六郎正国・長瀬六郎頼國が、⑬香住町御崎に落ちて来、これを修験者森本浄実坊が世話をしたという。『平家物語』によると、教盛は清盛の弟で壇の浦で入水、小宰相局も夫通盛が摂津湊川で戦死したのを追い入水。家長は合戦に活躍するが、屋島で平知盛とともに入水したとされる。郎党の名は、『同書』には認められず、中村は大味の神主家で、現在でも温泉町湯村の面沼神社の神主を勤める中村家は、浜坂町大味の神社も兼務しているが、それが末えいではないかと思える。矢引も御崎地区民として存在しているところから、この信仰を受け入れた在地住民だと考えられる。『顕晦録』によると、家長はさらに18香住町畑、小宰相局は中村八郎に奉ぜられ⑭浜坂町大味に落ちて終わったとする。実地調査してもこれは確認される。家長の場合、さらに12竹野町神原にもその分かれという家がある。

(3)越中治郎兵衛盛継・上総五郎忠光、郎党阿藤治盛清・大伴五郎清繼・越部六郎武庸・萩野八郎則時・江沼五郎景光・浜五郎頼時 『顕晦録』によると、以上の人々は⑯香住町鎧に落ちて来、そこにあった東福寺（今はなし）にひそんだとある。同地嵯峨家文書によると、寺名永尾山東海寺、真言宗丹後成相寺末、開山月海上人（寛徳二年（一〇四五）寂）、俗名藤原永福、開基は従五位但馬守藤原忠憲の孫の永忠で、永福には兄に当たる。

鎮守三宝荒神とある。『香住町誌』(四三頁)も同一であるが、月海上人は成相寺で修行、先ず薬師堂を建立、「庵月山」にあるとある。現在、堂が残っているのが、これに当たると思える。墓地を調査すると、庵主(寺)には、禅宗系の僧がつづいており、特に近世には同宗であった時代もあったと思える。

嵯峨家所蔵鎧村の『墓籍簿』(明治のものと思える)によると、越中家はあるが、その他郎党に当たる姓の家は存在しない。古いのは、越中・岡野両家で、藤原・嵯峨家も遅れて出てくる。一番古いのが、寛永十九年(一六四二)寂の帰空宗連禅定門であるが、傍らに真鏡院殿、観海院殿とある。次に承応二年(一六五三)寂、常春院殿禅定門とある。院殿のつくのは大名クラスに対して付ける法名であり、相当有力な家であったことが分かる。しかし、その名の付け方が不自然である。恐らく後で諡られた法名であろう。そして、寛永十九年寂の傍らに二人の院殿が並べてあるのは、少くともその人以前にまだ同家の人がいたことが考えられる。しかし、二代目も院殿がついているので、江戸初期は非常に有力な存在だったと思える。同時代に同家と岡野両家が存在し、ともに「禅定門・尼」を称し、その後もつづいている。この法名は逆修戒名で、江戸時代までは、本来の信仰が生きていた。恐らくこの両家が、宗教者的存在で、郎党に当たる家と思える。越中家については、寛文十二年(一六七二)寂妙善信女は「越中治右衛門母ユキ」とあり、このころ以後、江戸時代を通し「越中治右衛門」を称していた。特に元禄二年(一六八九)寂、宗元禅定門と宝暦三年(一七五三)寂、法雲院慈雲軒思明性庵主の両者は「越中治郎兵衛」を称している。恐らく前記「院殿」もこの庵主の時に諡られたのである。そして同人の子孫である意識を強めていったと考えられる。

同家の中に、前出家雲院の外、延享二年(一七四五)寂、鉄船良牛庵主がありこちらが先だが二代続いてい

る。同じころ延享三年（一七四六）寂、大方善道庵主が、嵯峨榮藏家から出ている。同家は、現在なお鎮守熊野神社の神主役を代々守りつづけている。恐らくこの特別な関係から、熊野系の修験者の後えいであろう。庵というのは、東海寺のことです。そのころから薬師堂になり、こうした半僧半俗の人が守った時代があったと思える。なお、越中家も、庵主をつとめ、代々禅定門・尼を法名とした点などから、宗教家の末えいと考えて誤りないであろう。同地鎮守社の脇社の中に、「二御霊社」があり、「俗に御霊荒神と云う」と註をしてあるが、これは越中治郎兵衛盛継と上総五郎忠光のものと
 思え、特に盛継のは、同家が祀り、後に自家自身がその子孫だと信じるようになったのである。なお、同家が当地に定着した時は、勿論寛永十九年以前であるが、それもあまり離れないころが想定される。どの系統の宗教者であったかは確認出来ない。鎮守社の近くの山腹には平家落人の供養塔があるが、この兩人のものかと思える。

『顕晦録』によると、上総五郎忠光は、さらに落ち⑩竹野庄大山（竹野町川南谷にある）に逃れたとするが、

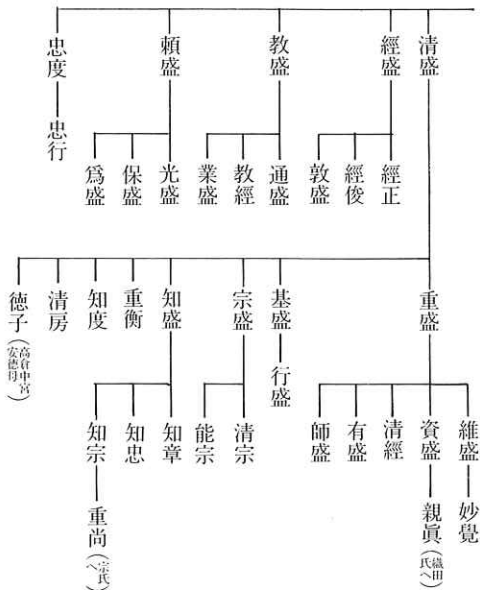


図45 桓武平家系図（『読史備要』より）

川南谷には、上総家（上総吉右衛門家）が現存し、その子孫と考えられる。同地にも平家落人伝承があり、小字平家という地名もある。同地区に入る小さな谷の入口に桑野本地区があるが、そこはすれに八大荒神の小祠があった（今は跡だけ）。八人の行者が祀られ、源氏が襲って来るのを警備したと伝える（伝承者井上隆夫氏、関戸八王子のことかと思える）。同社は上総忠光を祀ったものかと思え、鎧からの宗教者の移動が考えられる。

(4) 飛驒三郎左衛門景経・郎党岩本惣之則義・平野五郎盛繼 『顕晦録』によると、⑬丹生浦（香住町浦上）に落ちて来たとする。『平家物語』には、景経は平家の侍大将で、重盛の弟宗盛の乳母の子、大力の者で奮戦したが、壇の浦で戦死したとある。郎党岩本・平野は在地の協力者と思える。『帰仰寺縁起』に、平家谷に廻向院を建て、石塔を設け供養した丹治比経忠、入道した浄恵は、同じ落人と扱われているが、むしろ高野聖で、景経の霊を供養した人と考えられる。

(5) 飛驒四郎兵衛景久・郎党土生田五郎光義・淀五郎景清 『同録』によると、上記三人が⑭竹野町須井浦に落ちたとする。景久も、『平家物語』にみられる武将の一人で、最後は、重盛の子忠房を奉じ、紀州湯浅の合戦にのぞんでいるが、その後は分からない。土生田姓は、浜・奥両須井地区に多く、淀家も15香住町丹生地にあり、ともに平家落人の子孫だと伝えている。在地関係者の末えいと考えられる。丹生地には幸福寺（曹洞宗）がある。明治二十一年調「古寺取調書」によれば、もと真言宗で幸福庵といい、平家の余（与）党丹生道昭（仏門に入り輝雲入道）が建立した。兄弟三人があり、さらに須井・⑮香住町土生に分かれたとする。この道昭達は、前出『同録』には見られない伝承の系類である。

(6) その他

(7)平維盛の御台所・幼君虎若丸・家来斎藤五郎信実・平頼盛 『斎藤五郎信実当地在住由緒』(前出)によると、40八鹿町小田に、主君維盛の御台所と幼君虎若丸を奉じた斎藤信実の一行が落ちて来た。この信実は、『平家物語』に出てくる斎藤五郎宗貞とは別人である。一行の中にさらに④同町奥大江に分かれ落ちた者もいた。同地池田家がその末えいだという。別に大納言平頼盛(清盛の弟)を奉じる者がいて、さらに逃れ③養父町熊野に落ちた。その末えいが盛谷源左衛門家だという。以上を考えると、一行は熊野系の行者で、斎藤家及び池田家は、熊野比丘尼、盛谷家は同行者であったと思われる。

(1)平重盛 18香住町畑には小松家があり、重盛の子孫だと称し、系図も持っている。八大荒神を氏神としている。②香住町本見塚には、五輪山に数基の五輪塔が祀られてあるが、重盛の供養塔で、その子孫が久保家だと伝える(奥佐津^{志考})。別に安徳天皇のものだとい

伝承もある(伝承者久保徳太郎氏)。久保家がこの信仰を持ち込んだと考えられる。③村岡町板仕野の鎮守郡主神社には、重盛の木像が祀られてある。但馬で実際に木像まで作って祀っている所は此所だけである。同地には、竹原山重盛院長福寺(後真言宗となる)があった。寺伝によると、治承四年(一一八〇)に但馬守平経正が重盛供養のため建立、開山は法然上人の徒善教という。郡主



写252 板仕野郡主神社に祀られている重盛の木像

御社の別当寺でもあり、慶安四年（一六五二）大雪で頽廢した（七美郡誌稿、美方郡誌ともに前出）。創立の時の確実な時代は疑問があるが、浄土系善教が重盛供養のため建立したことは確かである。現在郡主神社に祀られている木像は、もと同寺にあったと思える。

(ウ)安徳天皇 前記した⑳香住町本見塚の他に、21日高町上郷がある。安政二年（一八五五）、同地の赤木勝之により作製された「官許但馬国新図」に、同地区気多神社近くに「安徳帝古跡」と「伊東墓」が並んで描かれている。同絵図は、各地伝承も書き入れた、興味あるもので、典拠も正確である。現在はその痕跡もない。円山川改修にともなう耕地整理の時に破壊されたのではないかと推察される。帝の古跡には供養塔があり、それにかかわりある伊東家の墓も並べて建てられていたのではないかと思える。

(工)平道盛 ⑳浜坂町正法庵には、平家落人の末えいと称する伊賀順三家がある。同家先祖伊賀求用が文化十二年（一八一五）に建立した法華一字石塔が、鎮守常立神社の鳥居前にある。銘文には「平道盛」供養のため、遠孫求用が建立とある。道盛の名は、『平家物語』にも出ず、この土地で作られた名前ではないかと思える。

(才)平盛重 ⑳豊岡市森尾には盛重寺がある。平井若狭守平朝臣盛重の開基で、はじめ千眼寺といった。盛重は、永録元年（一五五八）寂である。元禄年間（一六八八～一七〇四）幽室座元により再建、臨濟宗となった。それまでは真言宗であった。鎮守は清峯三宝荒神で、平井家代々の祀り神である（盛重寺蔵『清峯山盛重神』寺日記、宝暦八年）。本尊は如意輪観音であるが、かつては千手観音だったと思える。現在同地住民は、中井・盛重・平尾家であるが、これらの人々により盛重寺は維持されて来た。恐らく永録元年のころ、平盛重を奉ずる平井家等が建立したのであろう。清峯三宝荒神（現・清峯神社）は、平井家の先祖、つまり盛重を祀り鎮めたものと考えられる。

以上、安徳天皇をはじめ、平教盛（清盛の弟）・頼盛（同上）・重盛（清盛の子）・知盛（同上）、さらに小宰相局（教盛の子通盛の妻）・維盛（重盛の子）の御台所など、平家一族の人々、侍大将として活躍した越中治郎兵衛盛継・上総五郎忠光・飛驒三郎左衛門景経・同四郎兵衛景久・悪七兵衛景清等の名があげられる。さらに平道盛・同盛重等但馬独自と思われる名も加えられる。これらに従って来たとする郎党といわれる人々は、在地の協力者と考えられる。各種の宗教者が、いろいろの人々の霊を勧請し祀っている。これを、高野山附近の和歌山県下の場合、『平家物語』の「維盛出家」「熊野参詣」にみられる維盛に対する信仰が、その平家落人伝承の主流を占めているのと対比すると興味深い。

三、平家落人伝承地区の地理的条件

平家落人伝承のある地区は、孤立した所が多い。まず、⑥竹野町田久日・⑦同宇日・⑬香住町鑑・⑰同御崎・⑳浜坂町三尾のような海岸地区がある。特に御崎の場合、断崖に近い傾斜面に、しがみつくように家々が建っている。次に⑨竹野町三原・⑳香住町本見塚・㉑浜坂町大味・㉒同池ヶ平・㉓美方町備・㉔同小長迪・㉕村岡町小城のように、山奥の孤立した地区があり、まさに隠れ里（隠田農山村）的存在である。また、山間地区でも、①豊岡市伊賀谷・②同市谷・③同森尾・⑧香住町畑・⑩同土生・㉑浜坂町正法庵・㉒同辺地・㉓美方町野間谷・㉔村岡町板仕野・㉕同春木・㉖大屋町横行のように、谷間の行きづまりにある所も多い。

これらとは別に、5城崎町湯島の渡場（越中治郎兵衛盛継供養塔のものと位置）・21日高町上郷・34朝来町桑市のように、交通の要地に存在する場合がある。桑市では古墳にあり、その他の地区の辻や川辺の場合も、ともに死者供養の場である。また往来する人に供養を願うのに都合のよい場でもある。

こうした地区にあって、⑨竹野町三原・⑩同川南谷・⑬香住町浦上の平家谷、川南谷には小字平家もある。

⑰香住町御崎の招岩・寄合畑・馬場平・平家泉、18同畑の平家ヶ成、⑳生野町黒川の平家坂、㉑養父町熊野の旗樹の石（旗を上げるための石）、㉒大屋町横行の平家城（実は磐座）と姫ヶ淵など、平家にちなむ地名、また平家が隠れ住んだと説明するのによい名をつけている。

四、平家落人地区と荒神社（怨霊信仰）

平家落人地区には、鎮守社に荒神系の神が多い。荒神には三宝荒神と八大荒神とがある。前者は仏・宝・僧の三宝からとられた仏教化された荒神、八大荒神は、八大童子からの連想で、修験化された荒神といえる。前者は明治以後、三柱神社、後者は八柱神社と多く改称している。

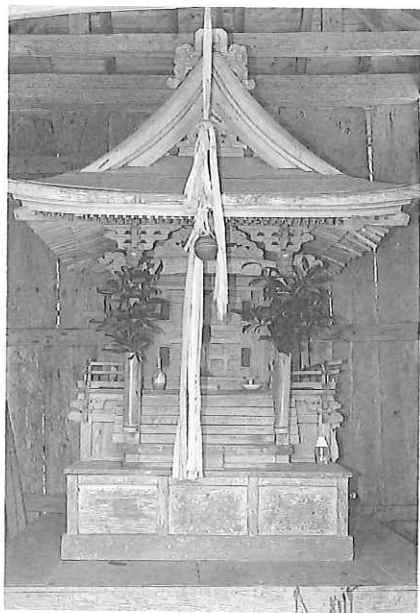
次に事例を示す。

- (1) 三宝荒神 ①豊岡市伊賀谷・②同市谷・③同森尾・⑥竹野町田久日・⑦同宇日・⑰香住町御崎・⑳浜坂町三尾（古三尾）・㉑同辺地・㉒同大味
- (2) 八大荒神 18香住町畑・⑰同土生・㉒浜坂町三尾・34朝来町桑市

以上であるが、これら荒神はもと「御霊神」

であった。この点、「余部村部落誌考」

（小林哲夫編
「御崎在村誌」）



写253 八大荒神（鬼神谷）

考四、大正十二年）に適確に記述されているので、これに出る社を検討する。

先ず、①香住町御崎であるが、図で示すと次のようになる。

小宰相局

門脇宰相教盛

伊賀平内左衛門家長

御靈荒神（荒神）↓三宝荒神↓平内天王（寛延三年）↓平内神社（明治六年）

平家落人の靈は、はじめ御靈荒神または荒神として祀られ、次に三宝荒神となる。ここで、「三宝」とあるところから、三体そろえなくてはならないと、三神になる。これが江戸中期寛延三年（一七五〇）のころになると平内天王となる。祭神の一、伊賀平内左衛門家長の「平内」から生まれたもので、伊賀家の勢力が非常に強まった結果と思える。

同地区文書、嘉永五年（一八五二）に生野御役人へ提出した「書上」には次のようにある。

左 伊賀平内左衛門

中 門脇宰相

右 矢引六良

中興より平内天王と尊号仕来候也

前記、平家三人の落人名は、天和二年（二六八二）撰の『但馬頭晦録』（前出）により、同地の古い伝承である。これに対し、「書上」のは、江戸後期の見方で、郎党の一人とみなされる矢引家が、小宰相局に代わっている。その理由は、同局が②浜坂町大味に移されたこともあるが、矢引家の勢力の台頭が考えられる。「書上」をみると正月行事には同三家が主役を演じている。つまり、三宝荒神は同家達にとっては祖靈的存在とな

る。

次に⑳浜坂町大味の三宝荒神社であるが、『顕晦録』に、この地に小宰相局と中村八郎吉純が落ち、同社には夫平通盛を加え、三神にしたことは既に述べた。「誌考」は、この三神を、「御霊神」と記している。なお、中村家については前記した。㉑香住町鎧にも『顕晦録』に越中治郎兵衛盛継と上総五郎忠光が落ちたとするが、鎮守十二社神社の脇社に「二御霊社、俗に御霊荒神という」と柱に記されており、実地調査でも怨霊とされていることもすでに触れておいた。

八大荒神については、18香住町畑には、平重盛の子孫と称する小松家が、氏神として同荒神を祀っていることはすでに触れた。この地区には、御崎から落ちて来たと称する伊賀家があるが、「誌考」によると、家長の霊を「御霊荒神ト称シ天神及其塚墓アリ」と記す。同地区小字天神には、森があり同神屋敷跡がある。また鎮守社境内に供養塔があり、伊賀家で祀られている。天神は、菅原道真を祀るが、怨霊の代表的存在の一つである。

以上、「誌考」を中心に、平家落人が怨霊（御霊神）として信仰されていることを述べた。これが三宝・八大両荒神とされるには、僧または修験者の関与が考えられる。天神も同類の信仰で、ここにも宗教者の介在が考えられる。それにしても、平家の落人は、怨霊の代表的存在だということが理解される。

五、平家落人を祀る供養塔

平家落人伝承地区には、よく供養塔をみかける。5城崎町湯島の弁天公園、もと神楽丘には、越中治郎兵衛盛継を祀る室篋印塔がある。南北朝時代の応安元年（一三六八）建立の銘文がある。もと円山川の渡場にあつ



写254 城崎町 弁天公園に祀られている盛継の供養塔

た。傍らの碑文は、明治になって建立されたものであるが、鎌倉で処刑された盛継を「城崎土豪某の女、曾て盛継（と）通す、屍を収めて瘞む、此墓即是なり」（海南近重真澄の撰文）と、同地での伝承を記述している。鎌倉から死体を運んだとするのは、墓、実は供養塔であるが、そこには死体が葬られている筈だということからの発想である。供養塔は魂だけを招いて建立するケースが多いのである。この塔が南北朝時代に建立されたのは、

僧侶が来て越中治郎兵衛盛継の怨霊を鎮めるため宝篋印塔を建立し、通行人に対し唱導活動をしたものと思える。4 豊岡市気比、白山中腹の同時代のものと思われる同塔も、これに呼応して建立されたものと推定される。

① 豊岡市伊賀谷には、昔、寺山に寺があった。その跡に宝篋印塔など多数あるが、現在二基が同市江野徳養寺（曹洞宗）に下されており、南北朝と室町時代のものである。

⑥ 竹野町田久日には、悪七兵衛景清と越中治郎兵衛盛継（又は主馬判官盛久）の供養のためという八方龕が二基ある。中に室町時代ないし江戸初期と思われる一石五輪が祀られてある。盲僧が来て、これに依り唱導活動をしたと考えられる。

⑦ 香住町御崎では、門脇宰相教盛が先祖だと伝える門脇家の供養塔が一番古い。高さ一坪ほどの石柱であるが、上部に（空・風・火・水・地）の五大が漢字で刻まれ、その他は風化し読めない。

筆者が昭和四十四年調査に行った時、その下から壺が出て、その中にひらがなで光明真言が書かれた小石がつまっていた由を聞いた（門脇幸雄氏談）。漢字の五大とひらがなの光明真言、この組み合わせから密教系の行者の仕業という線が出て来る。それも、普通梵字で書かれなければならぬものが、このようにくずれ庶民化しているのは、やはり室町時代が考えられる点を指摘しておく。

②⑩香住町本見塚には、五輪山があり、室町時代の五輪塔が数基祀られてあり、平重盛または安徳天皇の供養塔だと伝えられている。旧九月二十一日、地区をあげて五輪祭を行っていた。②⑦浜坂町池ヶ平にも木地屋伝承があり、木地屋及び蛇（竜）の供養碑があるが、その他鎮守社裏山頂上には、五輪塔（実際は五輪か宝篋印塔の残欠）が祀られ、地区民から五輪さんといって祭日もあった。

③⑧養父町熊野には、池ノ大納言平頼盛（清盛の弟）を祀る平家廟がある。『斎藤五郎信実当地在住由緒』（前出）によれば、頼盛が落ちて来、盛谷源左衛門と名乗ったとある。つまり盛谷家（現・同町三谷住）の先祖は、頼盛を奉じる宗教者ということになる。同地には熊野権現を鎮守社とし、地名も熊野（ゆうや）と称する点から、熊野系聖だったと考えられることは既に述べた。同廟は、村中の総先祖的存在であった。今は廃村同様であるが、それまでは（同地修正会が行なわれなくなった昭和十五、六年を想定するべきか）六月二十三日には小麦団子、十一月二十三日にはシトギ団子を椿の葉にのせ、地区全員がお参りをしており（「養父町のまつり」）、完全に先祖として祀られている。石室の中には一石五輪があり、室町時代のもので、同時代にこの平家落人伝承は持ち込まれたものと考えられる。

ここで問題になるのは、熊野神社の祭神である。祭壇を調査すると、木造の蔵王権現が祭神として祀られて



写255 岡益石堂

いる。破損ははげしいが作はよい。鎌倉時代にはいかぬが、それに近いものようである。同尊は大峯修験のもので、熊野信仰とは直接結びつかない。恐らく、先に修験者が定着していた後に、室町時代になり、熊野修験者盛谷家が、頼盛の霊を持ち込み、平家廟として祀り、熊野信仰の地となったと思える。

最後に参考として記さなければならぬのが、鳥取県岩美郡国府町岡益の岡益石堂といわれる安徳天皇の供養塔についてである。これは、鳥取・島根両県と但馬にわたる平家落人伝承の中核的存在であった。近頃、この石堂についての研究が進み、七世紀ごろのものだとされている（平勢隆郎氏「岡益石堂」など）。元来、これが安徳天皇供養塔でなかったことは明らかである。現地を調査すると、周辺におびただしい五輪塔（高さ六〇トシメ〜一トシメ）が散在

している。室町時代のものである。この石堂を中心にし、盛んに死者（逆修を含める）供養をした跡が歴然とされている。昔から石堂を管理している西尾家には、文明元年（一四六九）に書かれた『西尾記内録』がある。この中で、同家も越中治郎兵衛盛継の子孫であるが、都合により西尾家を称した。そして、その盛継が主となり、この石堂を安徳天皇の陵として建立したと述べる。この点から、仕掛け人は、同家先祖で、その時代も室町時代だと考えられる。

以上、供養塔を検討していくと、但馬の平家落人の供養塔の建立は南北朝時代からはじまり、室町時代がピークで、江戸初期に及ぶことが明らかとなる。

六、平家落人伝承地区の祭り事

平家落人伝承を、地区全体で信じている所では、祭り事が厳しく行なわれている場合が多い。それも修正会（オコナイ・お当）に集中している。

⑳香住町本見塚は、今は廃村であるが、かつては正月のお当の行事が、各家の座席も定まり、厳重に行なわれていた。前に触れたので重複はさげ、簡単に述べる。慶長十九年（一六一四）のころは、七人の山伏の移住もあり、三密村といわれており、木地屋が来訪したのは、享保十四年（一七二九）のころである。お当の行事には、その修験的時代があったことが注目される。

㉑村岡町板仕野では、現在でもお当の行事が厳重に行なわれている。場所は観音堂で、一月十五日（新）、三升三合の米で餅をつく。つき手は両親のそろった男子で、出来た餅（平たい一枚もの）は、長さ五、六〇センチの檜の木ではさむ。掛餅であるが、珍しい形として、この餅に「上下」かみしもを着せる。餅を神としてみている。十七日朝から翌十八日午後二時まで、村人（男）は、掛餅を仏壇に供え、一同堂に籠る。この間、食事以外は



写256 岡益石堂周辺のおびただしい五輪塔群

家に帰らず、仏前のローソクは火を絶やしてはならない。これは修験道の行事によくみられる例である。終わって当人の家と呼ばれ、新旧当人の交替のあと、かぶらの煮もの、水炊きの黒豆十粒ほど、水炊きのわらび三本など、徹底した精進料理をいただく。終わって餅は新当人の家に運ばれ、等分に切られ各家に配られる。前当人の家では、今度は家人等は精進落しの魚つきの膳をいただく。

③⑥ 朝来町岩津は、天正五年（一五七七）、熊野修験者の定着した系類がお当組をつくり、現在でも熊野神社に参るお当の行事を厳重に行なっている。正月五日の晩、当屋に一同が集まり、お鏡二升餅をつき、お幣八十重をつくる。床には熊野権現の軸を祀る。神主も来て正面に座し、脇に刀と御幣を持った子供が侍り、一同は左右に分かれて座す。神事が終わり、当番の交替が行なわれ、食事をいただく、丑の三つ刻（午前二―三時）、神―御幣（お当の家の子が持つ）―神主―御当組の順で行列して、神社に参り、奉幣し神事。六日朝、食事で終わる。餅は一同が以前はいただいたが、現在では神主に上げる。御幣も昔は当ノ岩まで奉っていったという。前に触れたが、お当役は、元禄十四年（一七〇一）は、一年間精進生活をしており、嘉永六年（一八五三）には月々の参詣で、当ノ岩まで参っていた。

①⑦ 香住町御崎の百手ももての行事は、近來但馬では有名な行事となっている。同地区には、前出嘉永五年（一八五二）に生野代官に提出した「書上」があり、そのころには正月行事は厳しく行なわれていた。

一、三十日夜子ノ刻（午後十二時）、つまり、大晦日の晩十二時に、村の男（戸主）は、籠堂（山王社前、今はなし）に籠り、御神酒と齒がための餅をいただく。正月迎えの行事であるが、この時「シタト唱へ」とあり、厳肅に行ない、不浄は大いに忌んだ。

一、元朝卯ノ刻（午前六時） 両社参詣。両社とは日吉山王社（鎮守）と三宝荒神社（左）伊賀・（中）門脇・（右）矢引で各家の先祖とする平家落人達、つまり祖霊社）で、この時、上記三家の中の当番が餅を供える。

一、二日朝卯ノ刻（午前六時） 両社参詣。この時、お当の行事があった。

一、三日朝右同刻参詣。お当の行事が終わり、その後、元朝に供えたお鏡を下げ、切って七切半を御社に供え、残りは村中へ配る。

一、三日暮六ツ時（午後六時）から花遊び。祖霊社である荒神社へ参り、前記三家を入れた七人衆が舞堂に上り、生笹の束（一把）を門脇家から順に持って三辺舞い、終わると堂前に参詣している村人の中の壮年男子一人を選び、無理に堂へ引上げ、村中かかって胴上げをし、一同大笑いしながら帰宅した。この花遊びはすでに忘れられた存在になっているが、三日間の籠りは比較の後まで残っており、古老に聞くと、舞堂に籠った戸主達は、中での行事は、例え妻にも話さなかったという。

一、三日夜正丑ノ刻（午前二時、実は四日になる）。七人衆が荒神社へ参り、舞堂で陣はら貝を七吹半するが、その間、村人は遅参することなく集まり、御社に参つてすぐ帰宅した。

一、四日朝卯ノ刻（午前六時）。同様のことが再び行なわれ、遅参の者はきつく罰せられた。

一、二十八日百手ノ式礼。（左）伊賀・（中）宰相（門脇）・（右）矢引の三人が弓取り、矢二十五筋を四度に分け、六本（残る一回は七本）をつづけて一せいに射る。七人衆の中、残る三人が矢取役、一人が遠的役（的のかかりか）を勤める。村人は左右に分かれて座し、六本を射終わるごとときの声をあげた。現在では、的に目を描き、これを源氏にみため、的に矢が当たるとときの声をあげ、武術をみがいたのだと地区の人は語

っている。

一、二十八日正月礼修。これを祝儀といい、伊賀家に村中の子供を集め、夕食を御馳走した。

以上であるが、現在では大変簡略化されている。陣貝での急ぎ集合、百手の行事などに修験的要素が認められる。また花遊びは、兵庫県下でも播州は多いが、但馬では筆者が知る限り、ここ一箇所にあった。なお同地には森本浄実坊が祀っていた伊楽神社（現・美伊神社）がある。前記、日吉神社（旧坂本三王権現）と平内神社より先に祀られてあった。

③⑧ 養父町熊野の六日当。この地区も現在では、廃村同様である。「無格社熊野神社」（明治二、三十年頃のものの）によると、旧十一月初卯の日に、お当の交替式を行なった。各戸主は、朝から当宿、つまり当番の家に集まり、まず鎮守熊野神社に参り、餅米一人一升あてを炊き、「卯の当の牡丹餅」という小豆をまぶった大きな握りを膳につけ、長老から順に座について食べた。この文書が書かれた数年前から、豆腐や油揚げを交ぜた御飯に代えた。この時、神田でとれた米の売買も行なった。

問題の六日当であるが、正月六日に行なった。鎮守社前の薬師堂を使った。そのため、同堂を、「六日堂」といい、平頼盛を奉じて来たという六軒衆（実は盛谷家、六軒衆はその奉祀に協力した家筋と考えられる）が中心に行なう。この点、御崎と共通性がある。『養父のまつり』（養父町文化財センター）によると、正月六日の宵宮から六軒衆が堂に籠り、椿の木で柴山、つまり神籠（ひもろぎ）（神を迎え祀る設備）を作った。これにゆるだの木（ゆるだ）で「削り花」（藤森頼之助氏の話によると長さ一〇センチ、幅五センチ）をつくり、柴山に挿し込んだ。この花には、一方の端に十文字の割れ目を入れ、その下方を花形に削り、福生寺（廃寺後は大仙寺）からいただいた牛玉札

を挟んでおいた。出来上ると、一同は一献かたむけて解散したとある。牛玉札は本来、法会が終わってから削り花に挿し込むものである。また、藤森氏の談では、六軒衆は堂に籠ったというが、本来はこうあるべきである。同氏は、柴山というが、一戸位の椿の枝をたて、これに削り花を沢山つけたと記憶しているという。これは柴山の簡略化された姿で、後に変化している。

次に六日の当日であるが、『前書』によると、村中の男が堂に集まり、まず福正寺の僧が柴山に対し読経、つづいて盛谷氏が当文を読み上げたとある。僧侶は、本来は修正会法則を壇上で行法しなくてはならないが、簡略化されている。当文も、その年の当番が読む筈であるが、盛谷家が毎年この役を勤めている。同家には、明治二十一年の当文一紙が残っているが、中に「奉修檀名当状之事」とあり、以下六軒衆の名が書き連ねられ、最後に「化教餅卅三、油三合、牛玉紙五帖」とある。当文としては、檀家の名前の他その年の幸運を祈る文面がなければならぬし、最後の文は、法要に準備しておく品を書き留めている。「化教餅」とは、修正会に供える餅のことであり、餅三三個は、役をした人に布施として与える分と、各戸に持ち帰る分とがあるのが本来である。牛玉紙は、牛玉札を刷るための紙である。

『養父郡誌』(七十五頁)によると、当状の読み上げが終わると、一同どっと柴山に押し寄せ、柴山の椿の枝を抜き取り、「ヨイヤヨイヤ」と大声で床を叩いて暴れ狂う。囲炉裏の灰は飛び舞い、招かれた僧はいたたまれなかった。本家衆(六軒衆)を平家、分家衆を源氏にみたて争い、時に血をみるころがあったとある。これは、江戸末期のころの様子である。前出『養父のまつり』が引く『建屋民話』によると、源氏にみたてられた分家衆は、負けることになっており、逃げ帰り、衣服を改め、平家大勝の祝言をのべて祝宴になったとある。これ

は、明治以降の様子を書いたものと思える。床を叩いて暴れ回るのは、実は神鎮めのためである。平家伝承が加味されるのは、御崎と同じ線をたどったといえる。

以上であるが、祭り事は、孤立した地区に住む人々に対し、プライドを持たせ、団結力を強めた。こうして地区全体が、中核となる平家落人の末えいである意識を深めたと考えられる。そして、修験的傾向が強いことが指摘される。

七、但馬の平家落人伝承の展開

但馬地方の平家落人伝承の筋書は、海岸地方では、壇の浦から落ちた安徳天皇を奉じる平家落人の一行は、台風にあい、日本海沿岸各地に、ばらばらになり落ちて来たとする。これに対し、内陸の場合、一の谷から落ちて来たとする両説に分かれる。しかし、海岸説の方が有力である。その中核となったのが⑰香住町御崎である。もう一つ大きく鳥根・鳥取両県と但馬を支配したのが、鳥取県岩美郡国府町岡益の岡益石堂を拠点とするグループである。その傘下にあつて、但馬をまとめたのが御崎である。この点から、岡益石堂と御崎の伝承とを検討する。

(1) 岡益石堂にまつわる平家落人伝承

岡益石堂は、現在その傍らにある長通寺（曹洞宗・明治三十四年までは北方の奥にあり離れていた、〔国府町誌一頁〕）が祭祀している形をとっている。しかし、その前に住み、同石堂を実際に管理して来ているのは、西尾家なのである。同家の『西尾記内録』（前出）は、その先祖西尾記内が文明元年（一四六九）に記したと奥書にある。

その内容は、安徳天皇の一行は、壇の浦で入水にみせかけ、実は生き延び、伯耆国繩の港（名和町）に上陸。倉吉―美作路―播州赤穂郡の奥北河内―因幡の国若桜―岩美郡大草谷おわかやの荒船（国府町）にたどりつく。文治元年（一一八五）のことで、帝は御年八歳であった。翌二年九歳で崩御。二位の尼（清盛の妻）はじめ公卿・諸将達は岡益の小山の峰に葬った。導師は随従して来た比叡山般若院の長通寺法師で、ここに住し長通寺（天台宗）を建立。石堂を造立したのは、新中納言知盛（重盛の弟）と越中治郎兵衛盛継で、特に盛継の尽力で、二万両をかけた。荒船の皇居跡にも崩御宮を建立。盛継の長子は出家し了善と称し、御廟前に草庵を建て、一生を供養に捧げた。帝に同道して来た公卿達も近くに隠れ住んだが、追々死に御廟の周辺に葬った。次男通房清右衛門が越中家を継いだが、世をはばかり西尾姓を名のり、代々御廟をお守りした。盛継は石堂成就の後、但馬に行き、そこで間もなく死んだとする。

この伝承には、問題になるいくつかの点がある。まず「二万両」であるが、これは近世の通貨である。『内録』には、本文末に享保の末（一七三六頃）に、但馬出石城主仙石越前守が御崎に平家の赤旗があるのを見に行ったことを付記しており、幾度か転写されたと考えられ、その間に手が加えられたと思える。次に般若院の住僧、「長通寺法師」というのも、本名とは思えない。伝承の中に生まれた僧名であるが、天台系の僧がこの伝承に関与したことは事実と思える。

次に西尾家であるが、同家が直接この石堂を安徳天皇の供養塔とした仕掛人で、越中治郎兵衛盛継の子孫だと自称する。元来は西尾姓なのだが、越中姓をはばかって同姓を名乗ったとする。長男が僧となったとあるから、同家は西尾姓であるが、越中治郎兵衛盛継を奉じた下級宗教者であったと考えられる。文明元年に記した

とあるので、室町時代前期には、ここに住みついている。石堂周辺におびただしい室町時代の五輪塔があるが、これを『内録』では、天皇に同道した人達の供養塔とするが、実はこの石堂を中心に、一般の人々に対し死者供養（逆修を含む）をすすめて建立させたものである。最後に、盛継は但馬に逃げてその地で死んだとするのは、明らかに但馬と相関連してこの伝承を作ったことを知ることが出来る。なお『内録』でも、「安徳天皇ノ御霊」と怨霊として扱っている。

次に誠に興味ある伝承を綴った『長通寺由来記』が、同寺にある。その内容は、大体『内録』と同じである。その伝承をもとに書いたと思われるが、『内録』がたどったとらしい文章であるのに対し、『由来記』は、非常になめらかで、「語り物」と思える。つまり、人に語り聞かせるために作られた、いわば『長通寺平家物語』である。内容も整備され、さらにフィクションが加えられている。壇の浦で主上及び二位の尼は、入水にみせかけ、実は水練達者な越中治郎兵衛盛継や伊賀平内左衛門家長に救われ、一行は隠岐の島岩崎の浦にただよい、さらに因幡国賀露の浦（鳥取市）にたどりつき、光良院宗源という天台僧に救われ、瓢単山（荒船村崩ヶ平）に黒木の御所を設ける。次いで、注目される記述が新しく加えられている。

（平宗盛は）重盛公薨去の後は、紀伊の高野の奥院にて出家を遂げ、名を西蓮と改め、殊勝の勤行に日を送りけるが、其後平家の一族悉く滅亡せりといふことを聞くより、竊ひそかに石碑を高野山・那智山及四国・播磨・摂津等に建立して追弔修善のこのみ心を竭しける。

何故この文章が加えられたかという点、野津龍氏（鳥取大学教授）もいわれているが、西蓮という高野聖が、この物語の唱導に加わっているからだと考えられる（『生きていく民俗』探訪一七二頁）。この中で、西蓮は、自分自身を平宗盛の

生まれ代わりとして物語っている。この人が長通寺に来て、宗盛に自分が成りきって、この『由来記』を物語っている。このようにして、自分が縁ある平家落人を自分自身とし、その土地にふさわしい平家伝承をつくり、供養塔などを建立して、物語り、その魂をなぐさめたと思える。その意味で、貴重な史料といえる。石塔を各地に建てて回ったというのも、この類の宗教者の実際の活動を記述していると思える。その後の部分も、『内録』とほぼ同一で、文治三年（一一八七）八月十三日、帝は十歳で崩御（『内録』は九歳）、尊骸を光良院（長通寺の前身カ）に移し、長通律師（『内記』は長通寺法師）を請い、引導師とした。石室は実は御陵であるとする。最後に注目しておきたいことは、自分自身を平宗盛と信じる高野聖西蓮が介入し、唱導活動をしたことである。それには琵琶をつかっただの語りを推定される。それと、この高野聖の出現と、『内録』にはない越中治郎兵衛盛繼の他に伊賀平内左衛門家長が出現していることである。これは、但馬の⑬香住町御崎と規を一にしている。同地では、伊賀家が中心的存在であり、嘉永五年（一八五二）の「書上」には、それまで天台系の修験者と思われる森本浄実坊が、高野聖とされている。これは、同地と呼応して活動をしており、この『由来記』も製作されたことを示す。

(2) 香住町御崎の平家落人伝承

天和二年（一六八二）に書かれた『但馬頭晦録』は、これまでもたびたび使ってきた。作者は不明であるが、内容を考えると、御崎の人が書いたと思える。そして、前記岡益石堂の二つの伝承の内、『長通寺由来記』と相通じる点が多く、既に近世初期のこのころから交流があったというよりも、その傘下にあったと考えられる。筋としては、養和帝（安徳天皇）は二位の尼に守られ、入水をよそおい船に乗せられ、対馬の国をめざした

が、暴風に押し流され、伯耆・因幡・但馬に、ばらばらに上陸した。その名が詳しく記してある。

伯耆―伊賀平内兵衛宗長・子息藤内家光郎、郎党磯見・長浜・溝口（郎党は姓だけとする。以下同）

因幡―養和帝・二位尼時子・丹後侍従忠房・右少弁経房、郎党荒巻・松垣・魚住

但馬

御崎（⑰香住町御崎）―門脇宰相教盛・小宰相局・伊賀平内左衛門家長、郎党中村・矢引・長瀬。ここで伊楽神社の修験者森本浄実坊に救われる。小宰相局は、中村を従えさらに二方郡大味（⑳浜坂町同）へ、家長は佐津庄天神山（18香住町畑）に移る。

鎧浦（⑱香住町鎧）―越中治郎兵衛盛継・上総五郎忠光、郎党阿藤・大伴・越部・萩野・江沼・浜。忠光はさらに竹野庄大山（⑩竹野町川南谷）に逃れる。

丹生浦（⑬香住町浦上）―飛弾三郎左衛門景経、郎党岩本・平野。

須井ノ浦（⑪竹野町須井）―飛弾四郎兵衛景久、郎党土生田・淀。

田久日・宇日（⑥竹野町田久日・⑦同宇日）―悪七兵衛景清・主馬判官盛久守（現在、現地では景清と越中



写257 香住町御崎入口の碑

治郎兵衛盛継とする。

以上については、すでに前に記しているのですが、ここでは触れぬが、実地調査と大筋は一致する。そして、この段階で、但馬全体の落人伝承のまとめが行なわれた点を注目しておきたい。さらに、これも前記したが、『西尾記内録』奥書に、享保の末、出石城主仙石越前守が、御崎に赤旗を見分に来ており、一層この伝承を整備しなければならぬという気運はたかまっていたと思える。

次に嘉永五年（一八五二）の「書上」も同様、生野代官所へ同地の伝承及び年中行事を届けている。その行事等についてはすでに触れたので、ここで必要な点だけを記す。まず、落人伝承であるが、『顕晦録』よりも一段と具体的になつている。隠岐国を目指した安徳天皇以下の一行のうち、①門脇・伊賀・矢引等七人の一行は、御崎の浦にたどりつく。②それを救ったのは、森本浄実坊という高野聖であった。③一飯の扶助を乞うと、小麦の蒸物を与えてくれ定着した。これを記念し、六月朔日には、鎮守社坂本山王権現に小麦の蒸物を葛の葉に盛って供えている。同社は落人七人の崇神だと記している。

①の七人衆というのは、この地区を開いた有力な家筋である。これが、平家落人伝承が定着していくと、その伝承に協力した家々も平家落人の末えいという認識が生まれ、やがて地区全体がそうだと信じるようになる。④の六月朔日鎮守社の夏祭りは、小麦の収穫祭であると同時に、祖霊祭でもある。この祭りを通して、その意識が深められた。この例は、³⁸養父町熊野の平家廟に対する祭りと同一である。そして、これを『顕晦録』の記述と対比してみても、その著された江戸初期の天和二年（一六八二）のころよりも、一段と、平家落人の末えいだという認識が深まったことを知る。

次に②の森本浄実坊が高野聖であるという記述についてであるが、『顕晦録』には、単に修験者とある。しかし同地に比叡山の山王社である「坂本山王権現」が祀られているところから、これを天台系と考える。それが、江戸後期には、高野聖となっている。その後同聖が介入したことを示す。これは、岡益と同一の動きがみえ、『由来記』の成立は、江戸後期が考えられる。

こうして、但馬各地に来訪した宗教者により思い思いに定着させられた平家落人の供養は、その関係者または地区に、平家落人の末えいだとの信仰を生むが、それを江戸初期に御崎を中核として統一された動きが『顕晦録』にみられる。そして、同地区では、江戸後期になると、完全に祖霊祭を通じ、地区全体のものとなっていく。その動きには、背後に岡益石堂を祀るグループの存在があつたと考えられる。なお、江戸初期の御崎の統一的動きは高野山麓かしろ学文路かしろのからかや堂（和歌山県橋本市）を中心に唱導された「菟萱伝承」と同じ動きが認められた。同伝承は、中世に説教節とし、高野山上の菟萱聖と善光寺聖とが協力して盛んに語られる。しかし、一旦戦国時代には衰退したようで、これを江戸初期に再び盛り上げたのは、浄土宗の僧で、これが現在につながっている（拙論「高野山山麓学文路菟萱堂の発生と女性と仏教 巫と女神」平凡社）。江戸初期は、このような伝承にとつて再生産の時期と思われる。

八、竹野町の平家落人伝承

これまで、但馬地方に四十一カ所の平家落人伝承関係地区を見出した。それを市町別に表にすると、次のようになる。

市 町 名	合計
朝来郡 朝来町	2
山東町	0
和田山町	1
生野町	1
出石郡 出石町	0
但東町	0
豊岡市	4
城崎郡 城崎町	1
日高町	1
香住町	8
竹野町	7
美方郡 浜坂町	6
美方町	3
温泉町	0
村岡町	3
養父郡 関宮町	0
養父町	1
八鹿町	2
大屋町	1

表19 但馬平家落人伝承地市町別表

右表をみても、香住・竹野・浜坂町に非常に多いことが分かる。わが竹野町にも七カ所ある。その各地区については、これまでに触れた部分が多いので、それ以外のことで、必要なことを述べる。

⑥田久日・⑦宇日。現在では、越中治郎兵衛盛継と悪七兵衛景清が落ちて来たと伝えるが、『顕晦録』には主馬判官盛久と景久とになり、江戸初期にはこの伝承があった。特に田久日には、八方龕二基があり、中に室町時代から江戸初期にかけての一石五輪塔がある。ここで注目されるのが、両地区の鎮守社が三柱神社、つまり三宝荒神であることである。前記荒神と平家怨霊との関係はすでに述べた。この両地区でも、この点を考慮に入れなければならないと思うが、現在ではこれに関する事象はつかめない。田久日の荒神は高さ一丈近くあり、赤色の立派なものである。現在ではお産の神様と信じられている。同社拜殿には昭和六十年五月から同六十二年二月迄の寄附札がある。計一九枚であるが、厄年祝六、結婚祝四、船・海上安全三、出産・家内安全・

新築祝各二である。宝暦九年（一七五九）の「神社書上帳」には、田久日に古塚権現社、宇日に神子大明神社がある。特に宇日の神子大明神社は、ここに「神子」（女性宗教者）がいて、神に祀られるほど重要な働きをしておるが、平家落人伝承との具体的な関係は分からない。

⑧ 鬼神谷 同地区鎮守社は、明治六年以降八幡神社と改称されたが、もと若一王子で、熊野系の神であった。同地区には八大荒神社があるが、延宝六年（一六七八）の棟札には、立花姓七戸、平姓五戸名があり、明治以降は橋、平岡に改姓した。その平姓が平家の落人の末えいだと称される。地区の伝承によると、平次郎兵衛・同次郎太郎の二人の兄弟が落ちて来た。次郎兵衛の子孫は現在の平岡洋一家（現在でも屋号次郎兵衛）だとい、同家には、長門介平景樹の書いた「夏日詠緑竹年久の和歌」の軸を蔵している。それを裏付けようとしての証拠品としてである。八大荒神は、この平・立花両氏の氏神的存在だったと言える。同地には、ラントウバと称する古墓地があり、明治初年までは両墓制だったと思える。埋墓に同年のころからの建碑がみられるからである。そこには、この両マキの詣り墓がある。盆には現在でも、先ずそこに参るといふ。若一王子を鎮守とし、八大荒神を氏神とする点から、この両マキは、熊野系の修験者の末えいではないかと思える。

高野山に近い奈良県吉野郡追川村北今西地区の正月のオコナイ（修正会）の当文をみると、同地区の住民も、藤原・平岡氏に分けて書かれている。平姓の人は、やはり平家落人の子孫を自称している。これと、同類の例が八大荒神の祭祀にみられる。江戸時代でも、農民が神事などに姓を使うことはよくみられ、本稿でも③①朝来町岩津、③②養父町熊野のオコナイの当文にもこれが認められる。ところで、この氏子を藤原・平、立花・平と二姓に对象的に使うのは、神事を行なうについて、格式を持たせるために、姓を称する必要がある、この時に

これらの姓を称した。そして平姓を称した場合には、後に自分達は平家の末えいだと信じるケースもあったと思える。

⑨三原 木地屋系類になる。本地区と木地屋との関係は深く、鎮守社産霊神社の明治三十一年の寄附板にも、「三原村寄留木地職小椋柳右衛門」以下の名があり、寄留扱いになっている。田村源一氏の案内によると、『顕晦録』にある大山（川南谷と共有）の他に、三川山系・水山（三原溪谷）にもあるという。話を聞くと、鉾石を採った跡を示しているようにも思える。事実同地には鉾石が採られており、山神社は立派で、御神体は鉾石である。なお、もとの鎮守社は現在同地区の出村である二ツ家にある妙見社だったという。もと小字山の上（小字大山）にあったが、流水でここに移ったという。15香住町丹生地・⑭浜坂町正法庵も同神を祀り、次に記す⑩川南谷の鎮守社「星神社」も同系統の権現かと思え、この面の今後の研究も必要と思える。

⑩川南谷 木地屋系統の伝承地に入る。しかし、『顕晦録』に、御崎にいったん落ちた上総五郎忠光は、さらに「竹野庄ノ大山ニ潜ミ」とある。この大山は、同地にあり三原とも隣接している。小字名に平家があり、上総家もあることは既に記した。宝暦九年（一七五九）『神社書上帳』に、同地には星大明神・関



写258 三原の妙見菩薩（産霊神社）

戸八王子社・三宝荒神社が存在する。現在この三社は、鎮守星神社に合祀されている。関戸八王子社は、井上隆夫氏が伝承する桑野本にあったとされる八大荒神社のことかと思える。とすると、八大荒神は修験道の八王子信仰と共通することになり興味ある事例となる。星大明神も、前項で記したが妙見菩薩に類似したものとして関心が持たれる。

同社は古いようで、棟札によると、天文十七年（一五四八）には、建立か再建か表の文字が摩滅して分らないが、本願藤原房次、各種那衆に藤原姓四、長部姓七人が名を連ねている。別当とは記していないが權少僧都朝鐙が祭祀している。轟蓮華寺の僧と思えるが、まだ別当としての関係は出来ていない様である。元禄十三年（一七〇〇）には、願主に庄屋太郎左衛門、年寄弥左衛門、社僧蓮華寺遍照院朝海が神事を勤めている。

前者は有馬、後者は井上姓を江戸時代以降称している。安土桃山時代の藤原・長部姓と、有馬・井上姓の者は、同地区の主流を占めた家筋であるが、その関連が分からない。それと、御崎から来たと称する上総家も現存するが、この両家筋の中に認められない。外来の家筋で、在来の地区民とは、はじめは神社の祭祀にかかわりがなかったように思える。同家とは、同じ平家落人伝承を持つ、関戸八王子（井上氏の言う八大荒神カ）に関連があるように思える。八王子は修験系の神であり、これが認められると、上総家自身に、修験者の性格が求められる。現神社近く（もとは下方にあったという〈坂田敬三氏談〉に岩蔵（岩座）といわれる地があるが、古代の祭祀場である。星大明神に対する祀は、先ずここで行なわれたと思える。

①須井 同地には、『顕晦録』によると、飛弾四郎兵衛景久が、郎党土生田・淀を従えて落ちて来たとする。土生田姓は両須井地区に多く、淀姓は15香住町丹生地にあり、同じく平家落人の末えいを称する。飛弾景久を祀っ

たとする遺跡は求められない。ところで、丹生地には、幸福寺があり、平家の余党(落人)丹生道昭が来て入道し、平家落人供養のために幸福庵を建立、また兄弟三人が分かれ、須井・^⑲香住町土生に分かれたとする。これは、『顕晦録』にはない。現地での伝承である。前記したが、『同録』はあまりに出来過ぎ、御崎でこれら但馬の同伝承をまとめたと思うが、この地には、幸福庵、後に寺になっているが、どうもこうした寺―僧侶などは避けて行ったのではないかと思える。これは、^⑬香住町浦上の帰仰寺(旧廻向院)と同一のケースと思われる。

なお、同地には、建武二年(二三三五)、徳大寺三位大納言の流れを汲むと自称する福田実孝が、都の争いに破れ、奥須井に流れて来たとする(福井実家蔵)。^{〔福田氏系図〕}。同家は祇園社を奉じて来ており、同社系の神人ではないかと思える。同社をはじめ両須井の神社の神主家となり、明治まで至るが、同家と平家落人伝承とは、関連ないようである。

¹²神原 ¹⁸香住町畑から移動したと称する伊賀家がある(伝承者伊賀久治郎氏)。伊賀庄右衛門を本家として三家があった。鎮守社山中神社(旧山中大権現)は、同家筋の氏神であった。七月二日の祭日には栗おこわを供えた。以上であるが、この山中大権現は、山の神であり、荒い神である。^⑰香住町御崎・^⑱美方町野間谷・^⑳生野町黒川も旧山王権現を祀っている。この点共通性があり、今後の研究課題とする。

九、まとめ

但馬地方には、平家落人伝承を持つ地区は、筆者がこれまで調べた限り、四一カ所もあった。これを系統別にするると、木地屋系一三、高野聖系八、熊野系六、景清系(盲僧)三、比丘尼系五、浄土系一、あるき横行(比丘尼系にも)一となる。持ち込まれた人々の名は、山間地帯では、安徳天皇(21上郷・^㉑本見塚、平重盛(18畑・^㉒本見塚・^㉓板仕野)、平頼盛(^㉔熊野)、越中治郎兵衛盛継(34桑市)、維盛御台所と若君虎若丸(40小

田・④奥大江)、さらに但馬独自の人と思える平盛重(③森尾)、平道重(②正法庵)があり、ばらばらである。これに対し、海岸地区では、『顕晦録』によれば、⑦御崎には、門脇宰相教盛・小宰相局・伊賀平内左衛門家長、小宰相局はさらに②6大味へ、①6鎧には、越中次郎兵衛盛継・上総五郎忠光、忠光はさらに⑩川南谷へ、⑬浦上には飛弾三郎左衛門景経、⑪須井には飛弾四郎兵衛景久、⑥田久日・⑦宇日には、悪七兵衛景清と主馬判官盛久と、御崎を中心に統一がとれている。ただし、同じ海岸地区でも、⑬浦上にかかりある帰仰寺(廻向院)建立の丹治比経忠(済恵入道)・⑪須井の幸福寺建立の丹生道昭(輝雲入道)には触れていない。寺を建立しているの、それに対し遠慮した節があるように思える。また越中治郎兵衛盛継が『平家物語』には唯一来訪が記されている。4氣比、これに関連する5湯島に落ちている。4氣比には景清伝承もある。⑥田久日・⑦宇日の現在では、越中治郎兵衛盛継を景清とし、『顕晦録』と異なることも、気になるところである。いずれにしろ、越中治郎兵衛盛継が多いのが特色である。

この伝承の地区的条件は、海岸・山中の孤立した地区、また山間の行きづまり地区など、隠田農山村の性格の所に多い。さらに5湯島の川辺の渡場・34桑市の街道筋傍らの古墳にある場合、川辺・辻は、死者を祀る所であり、こうした地点も僅かであるが選ばれている。地区内に、平家谷・平家成^{なる}など由緒ある地名をつけ、それを証拠立てようとする努力もされている。

祭神としては、荒神系のものが多い。三宝荒神九・八大荒神四で、特に「余部村部落誌考」が示す。これら落人は「御霊神」つまり怨霊として祀り鎮められていることを知る。その他、天神(18畑)としても祀られているが、同神も元は怨霊神であった。さらに山神社も四社あるが、同神も荒い神である。この中三神は比叡山

表20 但馬平家落人伝承地区表

番号	地名	鎮守社	摘要
①	豊岡市 伊賀谷	三柱神社 (旧三宝荒神)	
②	市谷	同上	
③	森尾	清峯神社 (旧清峯三宝荒神)	平井若狹守平朝臣盛重・盛重寺
4	氣比		越中治郎兵衛盛繼供養塔・景清地藏
5	城崎郡城崎町湯島		同上 (応安元年銘)
⑥	竹野町田久日	三柱神社 (旧三宝荒神)	越中治郎兵衛盛繼・(または主馬判官盛久) 景清 八方龕
⑦	宇日	同上	同上の伝承
⑧	鬼神谷	八幡神社 (旧熊野若一王子) 八大荒神	平姓
⑨	三原	妙見宮社 (旧妙見宮)	平家谷
⑩	川南谷	星神社・三宝荒神社 (旧星大明神)・関戸八王子	上総五郎忠光 (上総家) 平家谷・宇平家
⑪	須井		飛彈四郎兵衛景久
12	神原	山中神社 (旧山中権現)	伊賀家
⑬	香住町浦上	丹生神社 (丹生・高野両明神)	飛彈三郎左衛門景経 平家谷 帰仰寺 (丹治比経忠<済忠入道>)
14	上計	御霊神社 (荒神)	平家余黨藤原経忠
15	丹生地	多田神社 (旧妙見大菩薩)	平家余黨 幸福寺 (丹生道昭<輝雲入道>)
⑬	鑑	十二所神社 (旧十二所権現) 御霊神 (脇社)	越中治郎兵衛盛繼・上総五郎忠光 越中家
⑬	御崎	日吉神社 (坂本三王権現) 平内神社 (元御霊神一三宝荒神)	門脇宰相・小宰相局 (後に矢引)・伊賀平内左衛門家長 高野聖森本浄実坊
18	畑	八柱神社 (旧八大荒神) 天神社	平重盛・小松家 伊賀平内左衛門家長・伊賀家 高野聖の墓
⑬	土生	八柱神社 (旧八大荒神)	
⑳	本見塚	大倉神社 (旧小倉神社) 須賀神社 (旧荒神社)	安徳天皇又は平重盛 荒神社は平家守り神 五輪祭
21	日高町上郷		安徳天皇古跡
㉑	美方郡浜坂町三尾	三柱神社 (旧三宝荒神) 古三尾 八柱神社 (旧八大荒神) 三尾	平知盛・小西家中村昌義家に平家泊る 脇本家に高野聖の墓
23	戸田		安徳天皇の伝承 大隅大納言・井上家先祖
㉒	正法庵	常立神社 (旧妙見宮)	平道盛・伊賀家先祖
㉓	辺地	三柱神社 (元大荒神・旧三宝荒神)	比丘尼成
㉔	大味	三柱神社 (元御霊神・旧三宝荒神)	小宰相局・中村八郎吉純 (中村神主家)
㉕	池ヶ平	八大龍王	木地屋の伝承 五輪祭
㉖	美方町野間谷	野間谷神社 (旧山王権現)	
㉗	備		
㉘	小長迪		
㉙	村岡町小城		
㉚	板仕野	郡主神社 (重盛の像)	重盛院長福寺・法然の徒善教
㉛	春來		
34	朝来郡朝来町桑市	八幡宮 (八大荒神) (恒正大明神)	古墳 越中治郎兵衛盛繼・越中家
㉜	岩津	熊野神社 (旧熊野権現)	
㉝	和田山町朝日	同上 (旧熊野大明神)	
㉞	生野町黒川	日吉神社 (旧山王権現)	平家坂
㉟	養父郡養父町熊野	熊野神社 (旧熊野権現)	平頼盛・盛谷家 平家塚・旗樹、石
㊱	大屋町横行		あるき横行、平家が城・姫が淵
40	八鹿町小田		平維盛の御台、幼君虎若君、齋藤五郎信実・齋藤家
㊲	奥大江	若宮神社 (旧若王子ノ宮)	尼寺跡 (二)
㊳	鳥取県岩美郡国府町 岡益		岡益石堂、安徳天皇参考地、越中治郎兵衛盛繼・西村家 室町時代五輪塔群

系山王権現で、同神も分布している。妙見宮も三社あり、これは今後の課題とする。

宗教者が関与している地区（本地屋系以外）には、供養塔が建立されている場合が多い。これを魂鎮めのよすがとし、唱導活動をしたと思える。特に5湯島の宝篋印塔は、越中治郎兵衛盛継の供養塔であるが、応安元年（一三六八）の銘があり、4氣比のもこれによく似ている。①伊賀谷にあった同塔も同時代のものと思える。⑥田久日の八方龕（越中治郎兵衛・景清）には室町時代の一石五輪が多く、新しいもので江戸初期、②本見塚の五輪山の五輪塔、③熊野の頼盛の平家塚中の一石五輪ともに室町時代のものである。参考地である岡益石堂の周りにはおびただしい同時代の五輪塔群が祀られてある。以上で、この信仰が、南北朝をはじめとし室町時代に流行し、江戸初期にまで及んだことを知る。

同地区には祭事が盛んである。それも修正会（オコナイ・お当）に集中している。①御崎（大晦日〜四日のお当、二十八日の百手）・②本見塚・③板仕野（一月十七〜八日）・④岩津（五日〜六日）・⑤熊野（六日当）が取り上げられる。特に御崎では江戸中・後期になると地区を開拓した七軒衆の祖として、祖霊社三宝荒神に、六月一日の夏祭りに小麦のむし物を葛に包み供えられるようになる。熊野でも、頼盛の平家廟には、六月二十三日小麦団子、十一月二十三日シトギ団子を地区全員が供え、完全に落人は地区全体の祖霊神となっている。こうした祭事を通じ、平家落人の末えいの信仰は深まった。祭事には修験的傾向が汲みとれ、伝播者の宗教的傾向も窺われる。祭事は、地区民のプライドと団結を強めるのに効があった。

但馬に、特に室町時代に、各系の宗教者が持込んだ平家落人の信仰を、江戸初期に、特に御崎を中核として再編成する動きがあったと思える。天和二年の『但馬顕晦録』にこれが認められる。しかし、この背後には、

鳥根・鳥取・但馬全体を取りしまった岡益石堂を奉じるグループの存在があった。同地の文明元年撰とされる『西尾記内録』や『長通寺由来記』、御崎の『顕晦録』と嘉永五年の「書上」を対比すると、これが認められる。『記内録』では長通寺法師は天台宗、『顕晦録』では森本浄実坊は天台系の修験者とされる。それが『由来記』では高野聖西蓮が『同記』を物語っているのに対し、「書上」も、浄実坊は高野聖とされている。さらに、『記内録』には越中治郎兵衛盛継が活躍し、西尾家の先祖とするが、最後は但馬に落ちたとする。また『由来記』には、盛継の他に御崎に落ちたとする伊賀平内左衛門家長が出頭、ともに活躍したとする。こうした点、両地区が、相呼応して落人伝承を作ったことは歴然である。特に『由来記』は語り物で、平宗盛になりきった高野聖西蓮が、これを語ったいわば山陰地方の『平家物語』である点注目される。そして、江戸初期に再編成された但馬の平家落人伝承は、今に語り継がれている。

最後に、竹野地区の特色を指摘しておく。竹野には、七地区があり、但馬でも多い方である。海岸三、中間地二、山間部に二地区となる。⑥田久日⑦宇日は、盲僧景清系であり、田久日に八方龕があること。⑧鬼神谷では、熊野系若一王子を奉じ、八大荒神を氏神とするグループが、平・立花の両姓を神事のために称し、この中の平姓を名のったグループが、後に平家落人の末えいと信じるようになる。⑨三原では妙見宮をはじめ鎮守社とした点、今後の研究課題を提している。⑩川南谷の星神社も同系と思われる、さらに関戸八王子社は、八大荒神の発生のもとになるかと注目される。⑪須井に関連ある丹生道昭（輝雲入道）は15丹生地和幸福寺（はじめ庵）を建立、⑫土生、須井へと落人伝承を伝播した。これは、⑬浦上の帰仰寺の丹治比経忠（済恵入道）とともに、『顕晦録』に入らなかつた存在があることを指示している点注目される。